

地に墜ちた医療—今こそ医療詐欺から目覚めるとき

抗がん剤の開発にひけを取らないほど、ワクチン開発には膨大な数の動物が犠牲になっています。そしてその犠牲は、すでに人間の子供たちに及んでいるのではという危惧があります。7年ぶりにもう一度ワクチン全般について書かせていただきたいと思います。



濱井千恵 (鍼灸師)

1歳で25種を42回、
10歳までで32種を92回

ワクチン接種プログラム

昨年3月に厚生労働省は、小児用肺炎球菌ワクチンとインフルエンザ菌b型(HiP)ワクチンの予防接種後に、乳幼児4人が相次いで亡くなったことを明らかにしました。いずれのワクチンも接種を一時見合わせることを決め、自治体や販売業者に通知したらしいのですが、いつもの如く、ワクチンとの因果関係は認められないという最終結論を出して、同様のワクチンプログラムを開始されています。

このワクチンは、生後2ヶ月の乳幼児に接種されるのですが、乳幼児の細菌性髄膜炎を防ぐということで、一昨年度の補正予算による公費助成で始まりました。そこで、日本小児科学会が作成した子供のワクチン接種プログラムを調べてみると、1歳までに25種類のワクチンを42回打ちます。10歳までにはなんと32種類92回打ちことになるのですから、驚きの量と回数だと思いませんか？

人間は、生物學上最低でも6ヶ月までは、母乳から母親の抗体をもらって免疫機能を借りるようになってきています。ですから出産すると、必ず母胎免疫の一番濃い初乳をこの病院でも子供に与えます。その母胎免疫が機能している時期に、これほどまで大量にワクチンを接種する意味を考察しなければなりません。ましてや生後2ヶ月の乳幼児にB型肝炎ワクチンまで打つ意義は、この赤ちゃんが海外旅行でもするのでしょうか？母親が肝炎なら解ります。ですが例え肝炎であっても、母乳から感染するかどうかは、簡単な検査で解るのですから、全員に接種する必要はありません。

少子化に悩む大事な日本の子供を、このような生命に拘わる危険に晒す意義がどこにあるのでしょうか？そして、この時期

にどのワクチンを接種するのか現場の小児科医ですら悩む優先順位を、誰が何を根拠に決定しているのでしょうか？

インフルエンザ

今年も(現在2月上旬)インフルエンザが昨季を上回るペースで広がり、すでに患者数は全国で211万人を超えたという報道がありました。今季はA香港型とB型だそう、3年前に発生したインフルエンザ(H1N1)2009の3種類が含まれる混合ワクチンで対応しています。

服用後の異常行動や、幼児の睡眠時突然死などで社会問題にもなった解熱剤のタミフルですが、副作用を案じて処方箋を受け取らない患者がいるとのことで、病院ではその場で飲ませるところが増えたという話も聞きました。またタミフルに対して質問が多く寄せられるようになったので、医療現場ではタミフル以外に、リレンザやイナビルという鼻から吸入させるインフルエンザ薬も使われるようになってきました。

しかしまだまだタミフルは主流になっていて、15歳以下の子供には慎重に処方するという警告はいつの間にか無視され、ウィルスの増殖を抑制する効果しかないのに、現在ではまるでインフルエンザの予防薬のように処方されているのです。

世界中のタミフルの内、75%が日本で消費されていることを考えると、例年のように在庫を抱えたくない、という医療現場の悪感があるのではと疑いたくなります。

インフルエンザワクチンは無意味

ところがある番組で、徹底的に手洗いやうがい、そして来訪者制限を加えることで、5年間で入居者が一人もインフルエンザに

罹患していない老人ホームが報道されました。

強制ワクチン接種を実施してきた老人施設や高齢者を抱えた病院などで、毎年のように感染死亡者が出ているにも拘わらず、うがいと手洗いで、死亡者どころか罹患患者すらも出していないのです。ということは、インフルエンザには、ワクチンでは発症を完全に防げず、手洗いやうがいのほうが有効だ、とこの番組自体が実証したも同然です。

またワクチンは、肺や気管支の免疫力を高めることはできても、主になる感染経路である喉や鼻などの粘膜には作用しないので、「外出後の手洗いなどの予防策を心がけてほしい」と、ワクチン学の専門家である北里生命科学研究所の中山哲夫所長が発表しています。つまり手取り早く言えば、予防策は「手洗いとうがい」だけで良いわけです。特に老人は唾液の分泌量が少ないのと、水分摂取量も少ないので、口に水を飲むだけでも予防効果が上がるわけです。

人体をよく観察してみると、感染経路になりやすい部分でもある鼻、口、喉、目そして生殖器も含めて、水分で潤っている器官になっているのですから、感染防止には水洗いで良いことは自ずとわかります。そして、一番肝心なこの感染経路の喉や鼻の粘膜に抗体を作れないのなら、ワクチンは無意味という結果にもなるのです。

米のとぎ汁乳酸菌

ところが、そのような事が流布されれば、製薬会社やこの時期に大儲けする医療現場が許すわけがありません。ですから「肺炎の重症化を防ぐ」とか、インフルエンザで高齢者が犠牲になどといかにも恐ろしい病気のよう煽るわけです。しかし、米国では、高齢者の80%以上がインフルエンザに

ワクチンを接種しているそうですが、ワクチン接種で高齢者の肺炎患者が減ったという報告は一切ないそうです。また、高齢者とはもかく、乳幼児の脳症を怖がる人もいますが、脳症に至っては、厚生省の研究班ですら、ワクチンによる効果がないことを認めているのです。そうすると、これは「ワクチンビジネス」以外のナニモノでもないと思いませんか？

万が一インフルエンザに罹患したら、これは今年のウィルスの抗体をつけるワクチンチャンスと考えると、腰から足先に数個の湯たんぽを置いて、十分に身体を温め、しっかりと睡眠をとって自然治癒力で回復した方が解熱も早く、微熱や咳が長続きすることもありません。

インフルエンザウイルスは猛スピードで変異しているのですから、戦えるのは自分自身の免疫力以外にないのです。そして予防策として、皆さんもネットなどでご存知と思いますが、米のとぎ汁で作った乳酸菌の上澄み液を使った「がいを」をお勧めします。

この方法は、古くは江戸時代から行われていました。米のとぎ汁で作る乳酸菌は、長屋の共同トイレの臭いを消し、女性の化粧水代わりや、家屋、着物などの汚れ落とし、そして怪我の妙薬としても使われていたのです。昨今では乳酸菌が免疫をあげるという様々な飲料物が売られています。ヨーグルトなどの動物性の乳酸菌より、大豆やヨモギなどの植物から作った乳酸菌の方が、桿菌と球菌の数が大変多いのです。

作り方は、5合ほどの米のとぎ汁を2リットルのペットボトルに入れて、塩20グラム、翌日くらいに砂糖40グラムほど加えて暖かい場所に置いておけば、数日でできあがります。お風呂に入れば、身体が温まり肌は白く艶やかになります。寝たきりの我が家の犬の床すれば、あっとい

に治りました。お米を食べない人なら、梅肉エキスを薄めてうがいをしたり、葉茎に塗っても良いと思います。乳酸菌はウイルスだけではなく、歯周病菌や虫歯菌にも効果があります。

有害なワクチンの成分

ワクチンには、人体の健康を無視した驚くほど有害な防腐剤や殺菌剤が入っています。例えば最近では、アレルギーや自閉症の原因になるとのことで、防腐剤の一部に使っていたメチル水銀は、インフルエンザワクチンでは減りましたが、まだまだ他のワクチンの中では残留しています。

しかし、問題なのは、全てのワクチンの素材は、動物細胞の培養で生じた細菌や野生のウイルスで作られていることです。1950年代に世界中で爆発的に流行した小児麻痺（ポリオ）は、日本でも30000人を超える患者がでました。そのときにホルマリン不活性化ポリオワクチンがジョンソン・ソーク氏によって作られました。彼の名前をとって、不活化（死菌）ワクチンはソークワクチンと呼ばれているのですが、それはポリオウイルスに人工感染させたサルの上皮細胞を培養した液をホルマリンで不活性化したものです。

このようにあらゆるワクチンは、動物や人間の細胞を使っているのです。更に免疫を下げるゲンタマイシンの抗生剤や、スクワレンという免疫補助剤、脳の変性を起こすアルミニウムやグルタミン酸ナトリウム、そしてアナフィラキシーショックを起こしやすい豚や牛のセラチンも入っています。驚愕的なことは、ポリンルベート80、トリトンX100、アジュバンドなどの不妊剤が入っていることです。

このアジュバンドは、元々は犬猫の去勢や避妊効果があるものとして開発されてき

ました。つまりワクチンでもチップでも、まずは犬猫から始まるのです。そして必ずそれは人間に使われるようになっていくのです。

ワクチン戦争

この不妊に関しては、更に断種が目的ではないかと疑われる「子宮頸がんワクチン（英国GSK社製のサーバリックス）」は、日本でもあつという間に一人5万円もの接種に補助金が出て、私の住む三重県でもいち早く全額補助になり、小学生にまで打ち始めました。

昔から「ただより高いモノはない」と言われているのです。ワクチンの無料接種だけは、何の得もないどころか、大事な子供たちに取り返しのつかない事態を招きかねません。最近では女兒だけではなく、このワクチンを男児にも打とうという動きがあります。

当院の患者でもある小児科医は、まるでこのワクチンは小学生の子供にフリーセックスを教えているようなものだと言言を呈し、断固としてこのワクチンを導入しませんでした。平成15年3月の時点で、米国のFDAは

「HPV（人パピローマウイルス）感染と子宮頸がんの発症とは関連がない」ことを認めているのです。そしてこのワクチンは、1年以内に3度も打つことになっています。水銀系保存剤のチメロソールを含め、神経系のキランバレー症候群の副作用の恐れもあり、インドでは米国メルク社製の「ガータシル」で、イギリスやアメリカ、そして日本でも「サーバリックス」の副作用で、少女たちが死亡しているのです。

このワクチン接種は日本国民を滅亡させるという危惧から、弁護士の出言久治氏はいち早く厚生省に公開質問状を出し、ユーチューブなどでも警告を発しています。幼児から不妊剤の入った様々なワクチンを打ち続け、結婚半年ほどの若い夫婦に、早々に不妊治療を始める医療は、まさしく「狂っている」と言わざるをえません。

知人で愛知県の歯科医が、もつと虫歯にならないワクチンが市場に出るらしいと教えてくれました。更に現在ではあらゆる癌にならないワクチンも出るようです。その為にとれほどの動物が犠牲になり、どれほどの人間が犠牲になっていくのでしょうか？これはもうビジネスを超えて、「ワクチン兵器による戦争」と捉えた方が良いでしょう。

インフルエンザによる死亡数の推移



(注) 死因別死亡者数は毎年、超過死亡はシーズン年度と期間が異なります。(超過死亡については2005年からは、2004年から05年にかけての年間を示す2004年シーズンを表示)。最新年報載
 (資料) 厚生労働省「人口動態統計」、国立感染症研究所「感染症情報センター」月報 (48頁)